PIECE　OF　LOVE

波木蘭架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＰＩＥＣＥ　ＯＦ　ＬＯＶＥ

【Ｎコード】
Ｎ８４４３Ａ

【作者名】
波木蘭架

【あらすじ】
冷華は、自分の通う学校の教師・紫希と付き合っている。だが、紫希は冷華の気持ちに気づいてるのか分からない。冷華と紫希の関係はどうなってしまうのだろうか・・・。

第一話　本当に気づいているの・・・？

現在水華冷菜には、付き合っている恋人がいる。
「ねえねえ冷菜！風井先生かっこいいよねーｗ」
「え、うん・・・そうだね」
その相手とは、冷菜の通う学校の教師、風井紫希。
「水華さん、ちょっと来て下さい」
「あ、はいっ！」騒ぐ同級生を尻目に、冷菜は紫希についていった。

資料室まで来ると、紫希が口を開いた。
「すいません、急に呼び出してしまって・・・。この歴史の資料を運ぶの手伝ってくれますか？」
「いいよ。これでしょ」そういって冷菜は、棚にある資料を取ろうとしたが
とどかない。ジャンプするなり背伸びするなり色々試行錯誤していると、
「とどかないなら無理はしないようにして下さい」紫希が資料をとってくれた。
「なっ・・・！これくらいとどくよ！」「あなたのその背じゃとどきませんよ」
くすくすと笑う紫希を見て、冷菜は紫希が全校の女子に人気があるのを
実感した。と同時に、自分は幸せだなと思った。

だが、冷菜には一つの悩みがあったのだ。
「紫希、大好きっｗ」「その気持ちは充分分かってますよ。さ、行きましょう」
冷菜の紫希への思いがなかなか伝わらないという事だった。
元はといえば、告白も冷菜の方から。よく、本当に紫希が自分を好

きなのか
不安になることがあった。（紫希・・・本当に私の気持ちに気づいてるの？）

―　続く　―

第一話　本当に気づいているの・・・？（後書き）

実は教師と生徒の恋愛というストーリーは、前から
一度書いてみたかったストーリーの一つなので、
書くのがすごく楽しいです。
第二話はシリアスかも。

第二話　助けて（前書き）

小説の投稿の仕方が間違っていたので・・・。
改めて投稿します。
すいませんっ

第二話　助けて

「ただいま・・・」
自分以外誰もいないのに、ただいまの言葉を言う冷菜。
今日は紫希の事でかなり落ち込んでいた。
「はあ・・・紫希って本当に私のこと好きなのかな」
紫希がいつもどこか冷たいというか、そっけない。
抱きついたってすぐに仕事に戻ってしまう。
「もしかして紫希、迷惑に思ってるんじゃあ・・・」
そう考えると、泣きたくなってくる。
「あ、そういえば数学のノート切らしてたんだ。買いに行かないと」
冷菜は曇り空の中、２ｋｍ先の文房具屋まで出かけていった。

その頃紫希は、ノートパソコンを開いて仕事中。
「五時・・・そろそろ帰りますか」
そういって紫希は席を立つと、ノートパソコンをしまい、学校を出た。
外に出ると、雪が降っていた。
「いつの間に雪なんか・・・」

冷菜は、ノートを抱え、帰り足だった。
「ああ、雪降ってきちゃった・・・早く帰ろ」
冷菜は走って家に向かったが、家に着いた頃にはもう体が冷え切っていた。
「寒い・・・」
（何かくらくらする・・・こんな時紫希が来てくれればな・・・）
寒い中走ってきたせいか、冷菜は熱を出し倒れてしまった。

次の日の朝。紫希はいつもの時間に家を出たが、いつもついてくるはずの
冷菜がいない事に気づいた。
（寝坊したんでしょうか・・・？）
紫希は少し不安になったが、そのまま仕事に向かった。

続く

第三話　本当の気持ち

「えっ！？れ・・・（ではなくて）水華さんまだ来てないんですか！？」
学校に着いた紫希は、冷菜がまだ来てない事を知らされる。
「はい。まだきてませんよ」
「そうですか・・・」
（おかしいですね。休む時は学校か私に連絡するよう言ってあるのに・・・）

その頃、冷菜は高熱で苦しんでいた。
「～っ・・・」（苦しい、声が出せない！こんな時紫希がいれば・・・）
すると、冷菜の携帯が鳴った。かろうじて電話に出ると、紫希の声が聞こえた。
『冷菜！今どこにいるんですか？』
「・・・っ、し、き・・・」
『何をやっているんです。休むなら連絡をしなさい』
「くる・・・しぃ・・・」
『え！？な・・・』
冷菜は呼吸困難で気を失い、同時に会話も途切れた。

紫希は、仕事を早退し、冷菜の家に車を走らせた。
家の前に着き、中に入ると倒れている冷菜がいた。
そのそばにしゃがみ、体に触れると、体が冷えきっていることがわかった。
「一体何が・・・」
冷菜の近くにはノートが置いてあった。
「なるほど。雪の中帰ってきたので熱を出し、あまりの高熱に呼吸

困難になったんですね」
紫希は冷菜を抱き上げると、顔を近づけ、唇を重ねた。
「ん・・・」
「気がつきましたか。何故コートも着ずにでかけたのです」
「えっ！？昨日の事知って・・・！ていうかなんで・・・」
「あのノートが置いてあるのを見れば一目瞭然です」
冷菜をソファに寝かせると、そのそばに紫希が座った。
「まあ、無事で何よりです」そう言って微笑む紫希を見て、冷菜は一応意識してくれているのかと
安心したが、やはりどこか不安だった。
冷菜は起き上がると、隣に座っている紫希に抱きついた。
「どうしたんです？いきなり」
「私・・・紫希が好きだよ」
「それは充分わかっていますが・・・」
「紫希は、いつもそういう風にそっけなく答えるよね。私のこと、嫌い？」
「そんな事・・・っ」
紫希は、少々冷静さを失ったように反応する。
「なら、なんで私の気持ちに気づいてくれないの！？私が紫希をどんなに思っても、
紫希は私の気持ちに気づいてる様子ないじゃない！」
「冷菜・・・」
「紫希にそっけなくされる事は、私にとって嫌われるって事に近いんだよ！
なんで紫希はいつもそうなの！？」
俯き、静かに泣く冷菜を見た紫希は、冷菜の家を出て行ってしまった。

続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8443a/

PIECE　OF　LOVE

2010年10月8日22時37分発行